

(高杯、器台、小型壺・鉢) 全体の比率でみれば一之口遺跡東地区よりも能登や加賀に類似して」おり、「また、壺の比率の高さは加賀に類似」するのだという。西川内南遺跡Ⅲ期（8期）は、一見して甕の占める割合の低さと小型壺・鉢、高杯、器台の占める割合の高さが目を引く。提示されたデータは、SD1115という特定の遺構のものであるが、西川内南遺跡全体の器種構成比率は甕 36.0%、壺 6.0%、小型壺・鉢 39.0%、高杯 3.0%、器台 16.0% であり、概ねこの遺跡における器種構成の特徴を反映するものと考えて差し支えないだろう。

以上のように、西川内南遺跡を除けば、各遺跡とも甕を主体とする器種構成に変化はなく、少なくとも、7期からの変化がたどれる一之口遺跡東地区では本遺跡と同じく壺が減少し、器台を含む小型器種が増加するという傾向を示すことがわかった。この結果を頼りにすれば、本遺跡における器種構成比率の変化は、越後における時期的な変化とみて差し支えないものと考えられるだろう。壺については、一之口遺跡東地区より比率が高く、そういった点では南赤坂遺跡に近いといえようか。8期においても壺の比率が非常に高い南赤坂遺跡は、「加賀に類似する」比率との言及があり、越後としては異質な傾向なのかもしれない。特異ともいえるのは西川内南遺跡で、甕の割合が3分の1程度と非常に低く、小型壺・鉢、器台の占める割合が非常に高いのが特徴的である。西川内南遺跡は祭祀的な意味合いをもつ遺構や遺物が目立つ遺跡であり、そのような性格が器種構成の上でも影響を及ぼしているのかもしれない。

#### b. 甕の底部形態出土比率（第33図）

北陸北東部の土器について、「畿内系土器を相当量受容する段階」[川村 1993] とされるのが8期である。以後畿内系土器の定着がみられる。甕においては、布留系甕の流入による影響で丸底傾向にあることが指摘されている [川村前掲]。そこで甕の底部形態を計測し、さらに本遺跡とその北隣に位置する西川内南遺跡（6～9期）、反貫目遺跡〔寺崎ほか 2004〕（6～8期）との比較検討を試み、その傾向をさぐってみたい。計測に当たっては、形態や胎土などから甕の底部と認識できるもののうち、1/2以上残存する71個体を対象として、西川内南遺跡と同じく①底径3cm未満の平底、②底径3cm以上6cm未満の平底、③底径6cm以上の平底、④丸底の4種類に分け、前述a同様の地区割りで検討を行った。

本遺跡全体としては②が38個体で53.5%と最も高く半数以上を占め、①が26個体で38.0%、③が4個体で5.6%、④が2個体で2.8%となる。このように甕の底部形態は、大半が平底であることが分かる。①は3遺跡で比率が異なるが、②の比率は本遺跡と西川内南遺跡が近似値を示す。③は3遺跡とも10%以下と低い。本遺跡と反貫目遺跡は丸底④の比率が5.5%以下であるのに対し、西川内南遺跡は13.0%と2倍以上の比率を示す。

細かくみると、時期幅のさほど違わない12～16列と反貫目遺跡の比率が酷似していることが分かる。①と②がほぼ同程度の比率で、③が若干存在し、④は極少量である。丸底傾向にあるとされる8期を含む11E・Fは、個体数が少ないため良好な資料とは言いがたいが、丸底といえるものは出土しなかった。

まとめると、先にも述べたように西川内南遺跡は他2遺跡と比べ④の比率が高く、若干ではあるが丸底傾向にあるといえそうだ。しかし3遺跡全体を通してみれば、平底の割合が卓越しているといえるだろう。

#### 3) いわゆる有孔鉢について

ここでは、県内の弥生時代後半～古墳時代前期遺跡で散見される有孔鉢を集成し、形態による分類とその変遷を追い、さらに周辺地域の様相を概観し、県内出土の有孔鉢の特徴について考えてみたい。

## 研究略史

ここで扱う有孔鉢とは、尖底状、あるいは丸底状の小さい底部に焼成前の孔が穿たれる鉢である。県内の事例を中心みると、名称としては、用途をも特定する「甌」が千種遺跡の報告においてまず使われ〔大場・小出・本間ほか1953〕、斐太遺跡の報告でも用いられた〔駒井・吉田1962〕。続いて鉢形土器の一類型としての報告がなされ〔寺村ほか1978〕、80年代後半からは「有孔鉢」が広く使用されるようになる〔金子・坂井ほか1988等〕。近年は「甌」の使用〔関1999〕は減り、「大別器種とすべきかもしれない」〔川村1993〕という考え方も示されるが、鉢形土器の一類型として「有孔鉢」を用いる報告、研究が大勢を占めている。本報告では、器種構成比率においては鉢類に含めるものの、他の鉢類とは器形等が異なり、さらに用途をも異にしていると考えるため、「有孔鉢」の名称を用い、一器種として扱った。

分類については、一遺跡で複数出土した際にA・Bなどに細分されてきたが〔金子・坂井ほか1988；渡辺ほか1994；朝岡ほか2003〕、土器編年を行う研究等ではこれまで細分されてこなかった。上述の県考古学会シンポの資料集において、滝沢規朗が鉢の一類型としての底部有孔鉢を「身が深く、口縁部の立ち上がりが外傾する」CⅠ類、「身が浅く、口縁部の立ち上がりは内湾する」CⅡ類に分類したのが県内では最初の例となりそうである〔滝沢2005a〕。変遷観については、品田高志が出土例は少ないとしながらも「弥生時代後期からの特徴的な器種」で、「古墳時代前期まで使用されたようで、新しくなるほど尖底から丸底風に変化したようである」〔品田1991〕と理解された。その後は一之口遺跡東地区出土例を「弥生時代後期以来の在地の系譜を引く」もの〔春日1994〕と捉えられている程度である。

用途については、県内では当初、「甌(形)」と用途をも限定する名称が使われてきたことから、米を蒸すための蒸器としての理解があったものと思われる。近年「有孔鉢」という呼称に統一されてきた背景には、佐原真を代表とする5世紀以前は甌を使って「米は炊いて食べた」〔佐原1987等〕とする説によるものと思われる。一方、ここでいう有孔鉢については、「濾器と考える方がいいと思う」とされた〔佐原前掲〕。県内では、柏崎市史において「弥生～古墳時代中頃」までは甌を用いて煮ていたとされ〔坂井ほか1990〕、以後これが支持されているものと考えられる。一方、有孔鉢の用途についてふれた論考は県内では近年見られない。「濾過器」とする説が有力になりつつあるが、明文化されたものはないようである。

## 分類

県考古学会シンポの資料集を参考に、県内出土の弥生時代後期～古墳時代前期（一部古墳時代中期を含む）の有孔鉢で器形全体を把握できる資料は約70例を数えた（第11表）。これらを本報告分類のA・B・C・D類を基本とし、さらに細分した。以下に各分類の概要を示す。

A類：底部から内湾しながら開き、口縁部が内湾するものである。口径に比して器高がやや低く、底部が尖底状をなすA1類、口径に比して器高が高いA2類、口径に比して器高が低く、底部内面が比較的広く、丸底状をなすA3類に分類した。

B類：底部から内湾しながら開き、口縁部が直立、あるいは弱く外傾するもので、口径に比して器高の低いB1類、高いB2類に分けた。

C類：底部から直線的に開くもので、とくに直線的に開くC1類、弱く内湾するC2類に分類した。なお、底部より開く角度がC1類よりやや急で、主に2～4期に見られるものをC0類とした。

D類：口径に比して器高が低い浅身のもので、内湾しながら開くD1類、体部の一部が直線状をなすD2類、とくに小型のものをD3類とした。また、小稿ではふれないが、明瞭に口縁部を有する甌形、ないし鉢形の底部有孔土器はE類として一括した。

The figure consists of a grid of 34 numbered diagrams (1-34) showing cross-sections of a shell, likely a ammonoid, illustrating its growth stages. The diagrams are arranged in four columns and eight rows. Each diagram shows a different stage of the shell's development, with various internal structures like siphuncular structures and septa labeled with letters A1 through D3.

(番号は第11表と一致する。)

第34図 新潟県内出土の有孔鉢の分類と変遷

なお、粗雑な印象を与える細分のため、各細分類の中間的なものや誤認しているものが存在する可能性があり、細分方法を含め今後の課題としたい。

### 変遷

次に各分類の変遷について考える。第34図には遺構出土で、報告書やその後の研究により編年観が示されたものを中心に掲載した。時期は新潟シンポ編年を用いる。なお、土居下遺跡、反貫目遺跡出土例については、遺跡の時期や各形態の変遷を考慮し、すべて変遷図に掲載している。

A類:A1類の初出は千種遺跡出土1とする。県考古学会シンポでは遺跡の時期を3～5期とされているが、後述するようにA1類は5～6期にかけて北陸地方を中心に散見されることから、5期頃のものと考えたい。1に続くものとしては土居下遺跡出土2を置く。千種遺跡出土1と器形、法量が似る反貫目遺跡出土3は6～7期頃のものとしたい。本類は佐渡と阿賀北地域から出土している。A2類としては高山遺跡SE30出土4が6期とされている。その他の例も遺跡の存続時期から6期前後と考えられる。本類は頸城、信濃川左岸、阿賀北地域から出土している。A3類は土居下遺跡SX14出土5が7期、船戸川崎遺跡川1出土6が8～9期で、本類は信濃川左岸、阿賀北地域から出土している。

B類:B1類の初出例も千種遺跡出土7とする。6期は中島廻り遺跡1号古墳周溝出土8、7期は緒立B遺跡2号住居跡出土9、土居下遺跡SX14出土10、8期、10期は一之口遺跡SX2311出土11、SK679出土12がある。B2類は、正尺A遺跡SK2出土13が7期、東囲遺跡出土14が9～10期、一之口遺跡SK274出土15が10期のものである。B類は多く、柏崎平野、魚沼地域を除き広く分布している。

C類:C1類は緒立B遺跡2号住居跡出土18、津倉田遺跡SK461出土19とも7期のものである。C2類は反貫目遺跡出土20、土居下遺跡SX14出土例21が7期、北原A遺跡SI26出土22が8～9期のものである。C1・C2類は7期頃から頸城、信濃川左岸、阿賀北地域に見られる。なお、2～4期のC0類は佐渡、頸城、柏崎平野、信濃川右岸に分布する。

D類:D1類は高山遺跡SE30出土23が6期、釜瀬遺跡SX16出土24が7～8期、土居下遺跡出土25、船戸川崎遺跡第63号遺構出土26が8～9期、東囲遺跡出土27、28が9～10期のものである。D2類は船戸川崎遺跡第67号遺構出土29が8～9期、笛吹田遺跡工作用特殊ピット出土30、舟戸遺跡SK2出土31が10期以降のものである。D3類は東囲遺跡出土32が9～10期、古谷地B遺跡2号遺構出土33、上土地龜遺跡出土34は10期以降のものである。D類は8期以降、佐渡を除く越後全域で見られる。

以上から、5期頃にA1類、B1類が佐渡でまず出現する。続いて7期前後にA3類、B2類、C1類、C2類、D1類が出現する。9期前後にD2類、D3類が出現し、B1類、B2類、D1類とともに10期頃まで残存する。阿賀北地域はA・B・C・D類すべて見られるが、A類が県内各地域よりも多いのが特徴である。

### 周辺地域の概観

ここで扱っている有孔鉢は、川村浩司により「北陸系土器」[川村 1994等]とされているが、広義には「弥生後期ないし古墳時代初めにかけて畿内から東西にひろがる底部有孔の鉢」[佐原前掲]でもある。以下では小稿で細分した分類(C0類を除く)の周辺地域での様相を概観し、県内出土の有孔鉢の位置付けに迫ってみたい。時期は新潟シンポ編年を用い、広域の編年観は赤塚次郎氏の編年表を主に参考とした[赤塚編 2002]。なお、ここでみる類例は主に論文、シンポジウム資料集等で集成された資料によっている。

東北南部地方は6～8期頃にかけてA1類、A3類、B1類、D1類が見られる。一方、7期以降は平底の底部から直線的に開き、口縁部を肥厚させる器形が10期まで見られる[辻 1993; 黒田 2003; 植松 2005]。北・南関東地方は5～6期頃にかけてA1類、B1類、C類、9期にA3類が見られる[橋本 1993; 川村 1994・

## 2 遺物

掲載番号	所在地	遺跡名	遺構名	法量 (cm)		分類	遺跡の時期	備考
				口径	高さ			
1	佐渡市	千種遺跡		14.5	11.7	A1	3~5期	
				16.7	11.2	A1	3~5期	
7				18.7	13.5	B1	3~5期	
	佐渡市	二宮加賀次郎遺跡		15.2	9.5	B1	2~6期	
				18.2	10	C2	2~6期	
				15	8.8	C0	2~6期	
	上越市	東広井遺跡	11号土坑	14.8	7	D1	5~9期	
4	上越市	高山遺跡	SE30	15	13.2	A2	6~8期	
23			SE30	17.8	7.5	D1	6~8期	
19	上越市	津倉田遺跡	SK461	18	11.4	C1	5~10期	
22	上越市	北原A遺跡	SI26	15	10.7	C2	7期~	
15	上越市	一之口遺跡	SK274	15.5	11.7	B1	7~10期	
12			SK679	16.2	10	B1	7~10期	
11			SX2311	20.5	12	B1	7~10期	
				16.5	9.2	C1	7~10期	
				16.7	7.5	D1	7~10期	
				17.5	11.4	B1	7~10期	
			S18	17.8	12.8	E	2~4期	
16	妙高市	斐太遺跡群矢代山2区	SK9	15.7	10.7	C0	2~3期	
30	糸魚川市	笛吹田遺跡	工作用特殊ビット	19.5	9.1	D1	8期~	[寺村ほか 1978]
8	上越市	中島廻り遺跡	1号古墳周溝	17	12	B1	2、6、7期	
			SX13	14.3	7.7	D3	2、6、7期	
	柏崎市	高塙B遺跡		29.5	14.7	D 大	7~8期	
				33.5	20	E 大	7~8期	
	刈羽村	西谷遺跡		18.5	13.5	C0	2~5期	
				15.2	12	C0	2~5期	
	十日町市	柳木田遺跡	4号住居	20	9.2	D	8~10期	
	十日町市	千溝遺跡		17.3	7.1	D2	4~6期	
	新潟市	東園遺跡	SI2	18.8	15.2	E	9~10期	
14				16.8	14	B2	9~10期	
32				12.7	7.6	D3	9~10期	
28				18.8	8.4	D1	9~10期	
27				16.2	9.2	D1	9~10期	
				14.7	8.6	B1	9~10期	
				18	15.6	E	9~10期	
24	加茂市	釜湊遺跡	SX6	18.5	9	D1	7~8期	
	三条市	吉津川遺跡	SX347	20.2	8.6	D2	5~7期	
			Sx392	19.5	11.5	B1	5~7期	
	長岡市	横山遺跡		18.5	9.8		4~5期	
	長岡市	五斗田遺跡	土器溜まり	16.5	10	A3	6~7期	
	新潟市	的場遺跡		17.2	11.3	B1	5~7期	[小池・藤塚 1993]
				15.2	9.7	C2	5~7期	[小池・藤塚 1993]
9	新潟市	緒立B遺跡	2号住居跡	19.2	11.1	B1	5~7期	
18			2号住居跡	22	15.1	C1	5~7期	
			4号住居跡	15.8	8.5	B1	5~7期	
				23.3	13	C1	5~7期	[金子・坂井ほか 1983]
				17.1	14.2	E	5~7期	[渡辺ほか 1994]
				19.2	11.6	C1	5~7期	[渡辺ほか 1994]
				19	11.5	B1	5~9期	
	新潟市	御井戸遺跡		16.2	15	A2	5~9期	
				20.7	12	B1	5~9期	
	和島村	奈良崎遺跡	SK1	16.2	12.3	A3	1~10期	
33	荒川町	古谷地B遺跡	2号遺構	12	7.5	D3	9~10期	
26	胎内市	船戸川崎遺跡	第63号遺構	15.7	8.5	D1	8、9期	
29			第67号遺構	19	9.3	D2	8、9期	
6			川1	14	9.8	A3	8、9期	
	胎内市	六斗蔵遺跡	土器集中区viii	18.4	12.5		古墳中期	[岡安ほか 2005]
3	胎内市	反貫目遺跡	土器集中区II	15.5	11.7	A1	6~8期	
20			土器集中区II	16.5	11.5	C2	6~8期	
	胎内市	西川内南遺跡		11.4	11.7	A2	5~9期	
2	胎内市	土居下遺跡		12.9	11.3	A1	5~9期	
5			SX14	14.6	10.3	A3	5~9期	
10			SX14	14.8	9.8	B1	5~9期	
21			SX14	19.2	11.4	C2	5~9期	
25				15.5	8.8	D1	5~9期	
			たやしき遺跡	15.5	14.7	A1	7期~	
34	新潟市	上土地龟遺跡		11.5	8.4	D3	10期	
13	新潟市	正尺A遺跡	SK2	13.5	12.7	B2	7期	
	新潟市	葛塚遺跡		13.5	13.5	A2	5期~	
	新発田市	曾根遺跡		13.5	10	A3	5期~	
31	新津市	舟戸遺跡	SK2	19.5	9.5	D2	古墳中期	[川上 1995]
			SK2	20	11	D2	古墳中期	[川上 1995]

\*備考欄に出典の記載のないものは、[新潟県考古学会 2005] のデータによる（一部改変）

第 11 表 新潟県内出土の弥生時代後期～古墳時代の有孔鉢一覧表

1999]。能登・越中地方は5～6期にA1類、D1類、7期にC1類、D1類が見られる〔柄木2000；大野2003；岡本2003〕。加賀地方は4～6期にB1類、7期にD1類が見られる〔谷内尾1983；田嶋1986；安2003〕。北近畿地方は京都府浅後谷南遺跡出土例を見る。土器溜まりN出土例（5期併行）にB1類、C1類、SD2016（新）出土例（6期併行）にA2類、A3類、B1類、C2類、SK2003出土例（7期併行）にA2類、B1類、C1類が見られる〔高野2003〕。近江・山城地方は5～8期併行頃にB1類、C1類、C2類、D1類が見られる〔國下1995；赤塚編2002；（財）大阪府文化財センター2003〕。大和地方や大阪湾地方では本報告分類と対比できるものはないようである〔赤塚編2002；（財）大阪府文化財センター2003〕。

A1類は5期頃から南関東、佐渡、阿賀北、能登地方で見られ、B1類も5期頃から南関東、佐渡、加賀、北近畿地方で見られる。A1類、B1類は5～6期に加賀、能登地方から各地に広がったと推測する。C類は5～6期に南関東、北近畿、山城地方で見られ、7期頃に阿賀北、信濃川左岸、越中、北近畿、山城地方で見られる。北陸西部に見られるC0類が畿内で変化し、7期頃に各地に広がったのであろうか。D1類は6～7期に東北南部、頸城、越中、加賀、山城地方で見られるが、8期以降は越後地域に限られる可能性がある。8期以降の周辺地域の様相は、北陸南西部以西の資料数がとくに少なく判然としない。それでもB2類、D1類、D2類、D3類は8期前後から越後内で器形を変化させて10期頃まで使われたと考えられる。以上から5～6期頃の有孔鉢A・B・C・D類は「北陸系土器」としてよさそうで、これら有孔鉢とともに他の「北陸系」の器種が各地に移動したことは先学の指摘するところである〔川村1994・1999；比田井2004〕。

## 小 結

再び県内出土の有孔鉢についてふれ、小稿の結びとしたい。A1類、B1類は5期頃、A2類は6期頃、D1類は6期前後に加賀や能登地方の影響で作られた器形と考えられる。A3類はA1類が、B2類はA2類が変化して7期以降に続く器形かもしれない。C1類、C2類は7期に近畿地方北部から北陸地方で「流行」した器形ではないだろうか。D類は6～7期に県内に入り、8期以降多様に変化したようである。以上から、用途を同じくすると思われる県内出土の有孔鉢の形態変化は、5～7期では周辺地域の影響が強く反映され、8期以降は県内で独自に、かつ多様に形態変化がなされたといえそうである。

## B 木製農具大足について

### はじめに

木製農具の大足は、民俗例に見る枠組格子状の田下駄と用途を同じくすると考えられることから、近年では出土資料にも呼称されることが多くなったものである。民俗例では田植え前の代掻きなどに使用されたもので、昭和時代の前半頃まで佐渡地方〔山口1972；新潟県教育委員会1979〕や南会津地方などの山間部の湿田〔佐々木1994〕で使用してきた。今回の調査では、古墳時代前期の所産である大足が足板を伴い出土した。遺存状態は比較的良好で、①横木の数が17本と多いうえに、各横木間の間隔が狭いこと、②足板の枠組への固定方法が後代に一般的となる方法と異なり、3か所の横木に穿たれた2孔一対の円孔に縄などで固定されたこと、③枠組を構成する縦木、横木の木取りが不揃いであることなど、製作技法に特徴がある。以下ではまず県内の出土例を、次に東日本地方の古墳時代から古代の出土例を概観し、本遺跡出土例の位置付けを行う。